

くっきりと十字架 1954

～ 仙台教会の歴史シリーズ その11～

小林孝男

1. 献堂式には仙台市長も出席

1954年（昭和29）11月8日の河北新報の朝刊に、「くっきりと十字架 仙台バプテスト教会完成」というタイトルで、次のような内容の記事が掲載されています。

「完成を急いでいた日本バプテスト仙台キリスト教会の会堂はこのほど仙台市北四番丁電停前に完成、七日喜びの献堂式が行われた。

同教会は二十七年の十一月からグラント宣教師によって始められたが、独立した教会堂がないため長い間 YMCA に間借りしたり、仮幼稚園を使ったり、不自由な伝道が行われてきたもので会員たちの喜びはひとしお、真白い十字架が空にそびえた教会堂と集会堂、付属幼稚園があり献堂式はこの日午後二時から約二百人が集まって行われた、同会では新築を記念して七日から十二日まで毎夕六時半から特別伝導（ママ）講演会を開く」。

真っ白で、いかにも洋風で、堂々としていて、素敵なスタイルの教会を真正面から写した大きな写真も紙面を飾りました。記事には載っていませんが、献堂式には岡崎栄松仙台市長¹も参列していました。政治的なリップサービスでしょうが、「私はクリスチャンではないが、キリスト教が人類にとっての唯一の希望であり、あらゆる若者にその道を歩んでほしいと願っている」と祝辞を述べたそうです²。

2. 河北新報の記事では特伝の紹介も

新聞記事には「日本バプテスト仙台キリスト教会」という言葉が使用されていますが、教会組織の手続きがまだ行われていませんので、正式には「教会」とは呼べませんが、そんなことは世間ではどうでもいいことです。この報道によって仙台市民に「仙台バプテスト教会」の存在が、広くアピールされることになりました。特別伝道集会のお知らせまで記事に含めてくれましたので、その PR 効果はかなり大きかったことでしょう。

この特伝の講師は西南学院大学文学部神学科の三善敏夫牧師、大阪教会で働いていたアルフレッド・ギレスピー宣教師、音楽担当が旭川伝道所のダブ・ジャクソン宣教師、そして映画担当が連盟事務所の眞鍋長次郎氏でした。映画は空軍パイロッ

トから賀川豊彦との出会いなどを通して宣教師に転身するという、大変特異な体験を持つダブ・ジャクソン宣教師をテーマにした伝道映画だったようです³。この頃から教会組織への思いが教会員の高まったと、「仙台バプテスト伝道所沿革」は報告しています。

3. ロティ・ムーン献金と駐留軍チャプレンの協力

さて、この新会堂の建築資金 12,000 ドルはどのように準備されたのでしょうか。実は南部バプテストの国外宣教委員会のロティ・ムーン献金が用いられました⁴。そのことを私たちは忘れてはならないでしょう。「ロティ・ムーン献金」と言えば、今の私たちの感覚では、経済的に貧しい国でのキリスト教の宣教活動のために捧げる献金で、アジアやアフリカの発展途上国のことをすぐに思い浮かべますが、戦後の日本は、ロティ・ムーン献金が向けられた「経済的に貧しい国」そのものだったのです。

会堂内の調度品を整える資金は、仙台に駐屯した進駐軍配属の南部バプテストのチャプレン⁵が、軍のチャペル資金から提供してくれました。その額は 1,200 ドルで、これにより講壇の説教台と大椅子、主の晚餐用の台、重厚な長椅子 20 脚をそろえることができました⁶。当時これほどの調度品を備えた教会は、そう多くはなかったことでしょう。

また、会堂の塔の内部にスピーカーを取り付け、毎日「いつくしみ深き」のチャイムを地域に響かせていました。この機器一式も、アメリカのバプテスト教会の方が購入してくださったものです⁷。何年か後（天野五郎牧師の時代）、機器が故障し修理できない状態になったためなのか、あるいは近隣から騒音のクレームがあったためなのか定かではありませんが、チャイムは流されなくなってしまいました。

¹ 1946年6月から1957年12月まで仙台市長を務める。

² 『主の息吹の中で』61～62頁

³ 資料(1995/03/26_献堂四十周年記念誌)5頁

⁴ 『主の息吹の中で』55、58頁。中国で働いていたアメリカ人宣教師ロティ・ムーンからのアピールの手紙に応え、アメリカのバプテスト教会の女性たちが世界バプテスト祈祷週間を設け、外国伝道や宣教師派遣のためクリスマス前に献金に取り組んだのが、ロティ・ムーン献金のはじまりである(1888年から)。

⁵ 同上 60頁 ガレット・ナリー

⁶ 同上 60～61頁

⁷ 同上 56頁 サリー・マックラケン